

片岡義男 / 写真・大谷 勲
幸せは白いTシャツ



角川文庫

この本と出逢っていなければ、私はオートバイにも乗っていなかっただろうし、私の人生も動かなかっただろうと思う。

オートバイに乗った時の高揚感、ひとりで楽しむこと、いろんな人との出会いのきっかけを与えてくれた本なのだ。

片岡義男『幸せは白いTシャツ』。

昔、角川文庫から出ていた（赤い背表紙に白い文字でタイトルが書かれていた）片岡さんの小説がとても好きだった。片岡さんが描き出す、人の心のどろどろを徹底的に排除した乾いた世界に憧れていたのだ。タイトルも、それぞれ本当にかっこよくて、タイトルの文字を読むだけで刺激を受けた。中でもこの小説は「オートバイ乗りとしての私」のバイブルであった。

美しい（これ重要）彼女が、ひとりでオートバイに乗り、旅に出る。

自分が何者なのか自分がどうしたいのか旅に出て考える。考えると言っても、いまどきの「自分探し」みたいなものではなくって、考えている心の内部は全く書かれていない。そこがいい。

ひとりで旅に出るから、誰かと出会う。

そう。ひとりでなければ、自分が本当にやりたいことなんて考えることができないし、ひとりでなければ、誰かと出会うことだってできないのだよね。逆に言えば、ひとりでいると、いろんなことを考えられるし、誰とだって出会うことができる。

教習所に通っている時、オートバイで旅に出る前、たとえば北海道へと向かうフェリーの中で、私はこの小説を読んだ。気分を盛り上げるために。

私は、主人公の仁美のように美しいとは到底言えないけれど（白いTシャツだってツーリングで着れば薄汚れてちっとも美しくなどないし）、ひとりで何かする自信がつき、一生を通して友達だと思えることのできる素敵な人々と出会うことができ、今の人生がある。